

特集2 2023年 第14回 高校生の 建築甲子園



テーマ
地域の暮らし
——まちに住む・地域に開く住まい

主催 公益社団法人 日本建築士会連合会
都道府県建築士会

後援 公益社団法人 全国工業高等学校長協会
国土交通省

協賛企業 株式会社総合資格<総合資格学院>
ステッドラー日本株式会社

建築甲子園全国選手権大会 審査委員会

審査委員長 堀 啓二(共立女子大学家政学部
建築・デザイン学科 教授)

審査委員 竹江文章(教育・事業本委員会委員長)
伊東龍一(まちづくり委員会委員長)
山本道善(青年委員会委員長)
本間恵美(女性委員会委員長)

総評 堀 啓二 | 共立女子大学家政学部建築・デザイン学科 教授

2023 建築甲子園参加の生徒の皆様、初めまして。本年度からこのコンペの審査委員長を務めることになりました共立女子大学の堀です。私は共立女子大学で後進の指導にあたりながら設計活動を40年余り続けています。一貫して設計してきた建築のテーマは「まちに馴染む居心地の良い場の創出」です。

まちは環境と読み替えても良いかもしれません。建築は必ずある環境の中に建ちます。一度建つと少なくとも100年は存在し、まちな環境をつくります。なので、まちな環境を読み解き、街並みを継承し活性化していく役目を果たす必要があります。まちに馴染む建築が必要です。そのためにはひとりひとりが「まち」をつくっていく一員であるということを自覚する必要があります。

環境の時代、建築は使い続けなければいけません。建築は人がそこで生活・活動して初めて生きた空間になります。そのためには使いやすく居心地の良い場が必要です。ライフスタイルの変化やライフステージの変遷、そして現在の先行きが不透明な現代に対応できればなりません。使い続けるためのさまざまな変化に対応できるフレキシブルな建築を考えなければなりません。

建築の設計とは解答のない作業の中から一つの解答を見つけることです。建築には人が関わります。人が関わるということは十人十色というように10人いれば10通りのそれぞれの考え

方使い方、暮らし方感じ方があり、10通りの案があるはずですが、しかし建築は一つしかつくれません。さまざまな解答の中から自分の経験をもとに一つの解答を導く必要があります。そのためにはさまざまな調査、分析と考え続けることが必要です。

今回提出された作品には、空間はあるもののリアリティが感じられない作品が多く見られました。自分たちが考えた空間にリアリティを持たせるには、これらを基本にどのような生活や活動が行われるかを想像することが重要です。ぜひこれらのことを考え続け設計をしてください。

また、設計はやり続けるモチベーションが必要です。最後に次の言葉を送ります。

「才能というのはね、能力のことじゃないんだ。どうしてもやめられない性格のことなんだ。」

日本語学者・金田一秀穂さんは、研究者の道に進もうかと迷っている大学4年生の時、卒業論文の指導教授である小木貞孝教授に「研究者に向いているでしょうか。才能あるでしょうか」と尋ねました。小木教授は「わからない……」と言ってから、そもそも、そういう問題ではないのだと、この言葉で説明された。好きだからそれに熱中して取り組む。気づいたら、何かになっている。何かを成し遂げている。そういったことなのかもしれません。

ぜひ建築を好きになってやり続けてください。